

飼料用玄米を主体とした採卵鶏幼雛用飼料

研究のねらい

当場では、以前から飼料用米の研究に取り組み、鶏用飼料に使用されているトウモロコシを飼料用玄米で代替できることを明らかにしてきました。また、他方では飼料用米が幼齢期の家畜（鶏、豚）の発育を機能的に向上させることが明らかになってきています。

これらの成果を生産現場で応用・活用するため、当場で継続実施している鶏の経済能力検定の幼雛用飼料を、飼料用玄米を主体とした低蛋白質飼料に調製し、実用化に向けた検討を行いました。

技術の特徴

- 1 国内流通している幼雛用飼料は粗蛋白質（以下 CP）23 %前後ですが、飼料用米の機能性を活かすため、玄米主体とし1割程度 CP 水準を下げた CP20 %のクランブル飼料（玄米約 55 %）と CP19 %のマッシュ飼料（玄米約 59 %）を調製しました（写真 1、2）。
- 2 平成 25 及び 26 年度餌付けの 11 鶏種の幼雛用飼料として、1～2 週齢にクランブル飼料、3～4 週齢にマッシュ飼料を給与しました。なお、従来から体重増加が緩慢な鶏種については 3 週齢以降もクランブル飼料の給与で、指標値と同等以上の発育成績が得られました（図 1）。
- 3 特に 26 年度餌付けでは、全鶏種で若齢種鶏から生産された小さな種卵から得られた小型の雛（ジュニア雛）を供試しましたが、指標値と同等の発育成績が得られました（図 1）。
なお、栄養価を下げたことにより、飼料コストの節減効果も期待できます。



写真 1 : クランブル飼料「畜試前期 1 E X」



写真 2 : マッシュ飼料「畜試前期 2」

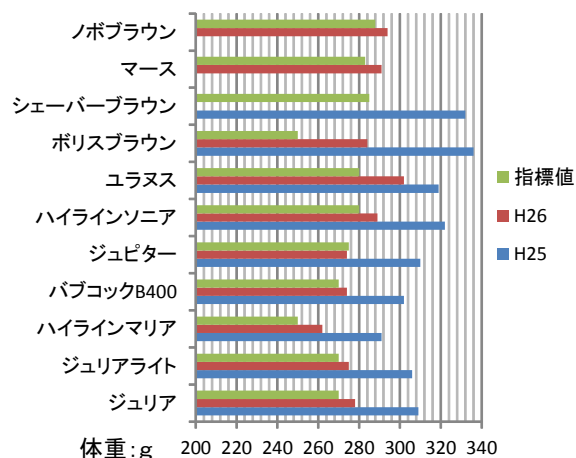


図 1 4 週齢時の育成体重

今後の取り組み

現在、県内の飼料メーカーにより「畜試前期 1 E X」及び「畜試前期 2」の銘柄で商品化され、県内外の育雛生産者に利用されはじめています。利用者からは原料の飼料用米の細粉化等の要望もあり、改良を進めています。
(執筆者：後藤美津夫)